



大学生だったら
らこうするね

まつり

昨日までの雨が嘘のように今朝から柔らかな日がさし、気分は天気と同じ。もうなんかスキップなんてやっちゃうよ。自転車だけどさ。

しかしこれまた不思議な物で、あれだけ出かけは心地よかった日差しも、通学半分もしないうちに暴力に変わっていた。なにせ、暑い。学校についた頃には胸の前に大きく跡を残していた。

更に不思議なことに、教室では更なる暴力が行われていた。なにせ、寒い。なんでこんなにクーラーをきかせにゃならんのだ。服が乾く前に体は冷え、汗をすっかりしみ込んだ服が更に追い打ちをかける。残念だが、これじゃ勉強どころじゃない。

ひとまず教室を出た。瞬間、むっとする暑さが襲ってくるがそれがむしろ心地いい。はあ。生き返るよ、ホント。やっぱ人間自然の流れに逆らっちゃいけないね。暑いときは暑い、寒いときは寒い、それに逆らって温度を操るなんて、人間ってヤツあ業が深いねえ。

「おやおやあ、アサヒさん、さぼりですかあ??」

12号館の前でぼーっとしてるとリクがやってきた。

「うるさいなあ、遅刻するお前には言われたくないね。いいか？俺はちゃんと時間通りにきて授業を受けてんの」

「じゃあなんで今、ここで、だらだらしてるんだよ。そんなんだと、また単位取りこぼすぜ」

「リク、大学で大事なものは単位か？違うだろ？」

「ほほう。じゃあアサヒさんに伺いましょう。大学とかけまして一番大切なものととく。その心は？」

「一番大切なのは、学ぶことだろう。単位なんてそのおまけにすぎない」

「だったらなんでここにいんだよ、授業うけないと学べないだろ」

「学ぶたって色々ある。こんな時間に、お前とだらだら喋ってんのも、ある種の勉強さ」

「はあ？」

「考えてもみる。社会に出て、サラリーマンにでもなったら、平日は毎日仕事だ。家族でも持とうものなら、土日は家族サービスでうまることだろう」

「まあ、たしかにそうかもしれないな」

「だろう？だったら、授業をうけるのもたしかに重要だが、この貴重な時間を、今でしかできないことにつかうのも、大切だ」

「ははあ、もっともなことをおっしゃりますね。だがな、俺はおまけでもなんでもいいから単位が欲しいんだよ、もういいからさっさと教室入ろうぜ」

「バカめ。そんなんだからお前はバカなんだ」

「おい、なにさりげに2回もバカ呼ばわりしてんだ」

「今教室に入ったら、寒さで風邪を引いてしまう。するとどうだ？今後、別の学業に支障をきたしてしまう」

「夏風邪ひくのはバカだけだ」

「じゃあお前は確実にひくな」

「てめえいいかげんにしろよ」

「人間は自然の摂理にしたがって生きるのが一番なのだよ」

「わけわかんねえよ」

「あれをみろ」

「あ？猫...か？あの猫がどうした」

「猫は眠い時は寝てるし、腹が減ったら食う。そういうことだ」

「は？」

「暑いときは暑い、寒いときは寒い、眠いときは眠い、だ！」

「えーと??」

「だから、食いたいときは食えば良いんだよ！！」

「・・・つまり、腹へったの？」

「そういうこと。今からお前は、俺と学食で朝定を食いに行くんだ」

「なぜそうなる...」

「ほほう、まだ俺のご高説を賜りたいようだな」

「ああ、もういいよ！わかったよ、行くよ学食」

「最初からそう言え」

「っは～、俺の貴重な単位が...」

なんつー撫で肩っぷり。リク、お前も苦労しているんだな。しかたない、学食はお前のおごりだが、水は俺がついできてやろう。

そうして、僕らは学食へと朝定食を食べに向かった。

...そして、これが全ての始まりだった。